

壮春力歩

会長 鈴木 末一

あけましておめでとございます

皆さま方におかれましては、輝かしい新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。

今年は改元の年。決意が改まる気がします。会創設 18 年目を迎え、会員数も年々増加してまいりました。昨年も関係機関等の各種会合で、ボランティア活動に勤しんでおられる多くの方々との出会い、語らいの場を経験することができました。地域社会の一員として多面的な活動を積み重ねておられる様子を垣間見ると共に、いずれのプロジェクトにも、「持続可能な発展のための環境保護および改善」という視点と、「次世代へのアクション」といった課題が大きなポイントとなっているように感じました。

本会も次なるステージに想いを馳せていかなければなりません。「歴史的風土と自然環境に恵まれた里山を次世代へ引き継ぐ」、即ち、今日までの里山整備活動の「復旧と保護」から「現代に必要とされる里山創生」へと展開していくことが、喫緊の課題ではないでしょうか。そこで、言い古された言葉ではありますが、「初心忘るべからず」でしょう。牧野富太郎博士が「人間はもともと自然の一員なのですから、自然に溶け込んでこそ、はじめて生きている喜びを感じることができるのだと思います」と言われています。この簡潔にして深遠な言葉に思いを馳せております。

老若男女を問わず、世代間を越えて、全ての人々が、自然に親しみ、自然の中に飛び込んでいくことによる体験を通して、目に映じ(視覚)、耳に聞こえ(聴覚)、肌に感ずる(触覚)など、自分の持っているセンサー(五感)を最大限に研ぎ澄ませて観察し、それによって得られた体験から多くのものを学び取ってもらえるようなエリアが、ならやま里山林となればと願っています。さらには、全ての世代間で共有体験可能なステージとして利活用できればと思います。対象となる人たちが、どのような構成メンバーであるかによって、多種多様な

体験パターンが考えられるのではないのでしょうか。企画段階において、対象となる人たちの自然体験に関わる実態の把握とともに、どのようなニーズがあるのかについても、十分な理解をし、両者のバランスも考慮しながら、今日まで培ってきたものに拘らない、柔軟な新しい発想を反映させた取り組みが、キーポイントとなるかと思えます。

ところで、会の活動拠点となっています「ならやま里山林」について再確認してみたいと思います。2007年3月に幹事代表の5名の方が、現地視察をされたとき、目の前に広がる情景は、想像を絶する荒涼殺伐としたものでした。幹事会での再度にわたる慎重審議の上、「ならやま里山林プロジェクト」として取り組むことが決議されました。5月3日、9名の方々によって活動がスタートしたのです。開拓者スピリットを存分に発揮し、生駒棚田や忍辱山間伐体験などの活動と並行して月2回の活動、インフラ整備やマップづくりなどから始め、10月から本格的に里山林の進入路(観察路)整備に取り掛かれたのです。今日とは比較にならない少人数での活動でした。先達の皆さんの汗と土に塗れたご苦労が、ならやまプロジェクトの礎であることを忘れてはなりません。勿論、活動面積も拡大していますし、内容も多種多様になってきてはいます。それぞれに個性とニーズがあり、多様化した個性の数だけの夢実現を目指すハードルは大変厳しいものであります。だからといって手をこまぬいていても進歩は望めません。志豊かで良識ある個性と人間力が根底に備わった集団でなければなりません。

金子みすゞの詩に「鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい」(「私と小鳥と鈴と」という一節があります。私たちは時々、一方を追求することに熱心なあまり、他方がおろそかになり、結果的に偏った物の見方をしてしまうことがあります。金子みすゞの詩の観点を、しっかりと味わってゆかなければと自分に問いかけている日々であります。

主役は会員の皆さま方お一人お一人です。

本年もよろしく願いたします